

# 陸前高田実習 (地域研究実習Ⅲ:2011年度、地域研究実習Ⅱ: 2012年度)の概要とその成果



2013. 3.14.

東日本大震災フォーラム  
熊谷圭知(お茶の水女子大学)

# 実習の背景

- \* 東日本大震災⇒日本の多くの人々にとって、尋常ではない苦しみ、衝撃と悲しみをもたらす
- \* 何かをしたいという思いに駆られる
- \* 東日本大震災に関心を持ち、ボランティアなどで被災地とかかわろうとする学生：多い
- \* しかし、かかわろうと思いつつ、実現する機会を得られない学生⇒さらに多い
- \* 現地実習授業という形を通じて、被災地に赴き、その現実から学んで、かわりの機会を学生に与えること⇒大学の役割でもある

# 実習の目的

- \* ①東日本大震災の被災地(岩手県陸前高田市)を訪ねて、被災の現状と復興の過程を自分たちの目で確かめる
- \* ②(可能ならば)そのささやかなお手伝いをする。
- \* ③(具体的には)陸前高田市Y小学校の仮設住宅集会所におけるコミュニティ・カフェの運営に参加しながら、許される範囲で住民からの被災体験の聞き取りなども行う。

# なぜ陸前高田を選んだか？

- \* 2011年4月下旬に気仙沼、陸前高田、大船渡を最初に訪問 ⇒ 周辺地域に比べても被害が甚大(中心市街地が壊滅、死者・行方不明者合わせて1割近くにのぼる)
- \* 教員の一人が地縁を持つ(父の生まれ故郷)地域 ⇒ 最初の訪問の基盤づくり(宿泊先、訪問先、交通手段の確保...)に必要不可欠
- \* さまざまな幸運な出会い(Y小学校仮設住宅、自治会長のS氏、集会所の建設...)

# 陸前高田市の被害状況

- \* 低平な市街地中心部のほとんどが壊滅
- \* 震災時の総人口：24,246人
- \* 死亡者数：1691人（行方不明者・その後の病死等を含めると2千人近く）
- \* 全壊3,159戸（半壊を含め3,368戸が被災）
- \* 農業、水産業にも甚大な被害
- \* 農地の被害額：77億円
- \* 水産施設62億円、漁船64億円、養殖施設20億円
- \* 小学校1、中学校3が全壊（在学中の児童の被害無）



# 公共施設の被害状況

市街地中心部の14の公共施設は市役所・市民体育館(写真)はじめ全壊。現在取り壊しが進む(今年度内にすべて解体予定)



# 実習の内容

- \* 往復、夜行バスを利用(4泊3日)
- \* 木曜日夜:東京を出発。金曜の早朝:陸前高田着。月曜朝:東京に戻る
- \* 金曜日:市街地見学、市役所からの聞き取りなど
- \* 土曜日～日曜日:Y小学校仮設住宅集会所で、「お茶っこ」カフェ開催。住民との交流。イベントなど
- \* 学生参加者:5名(毎回変わる)
- \* 教員:1-2名、TA:1名(同一人が継続)
- \* 宿泊施設:地元の方から借りた家、高田ドライビングスクール宿舎、玉の湯(山の上にある地元の湯治場)
- \* 市内の移動:地元の方運転のワゴン車(運転手以外7名乗車可)

# 実習の課題

- \* 宿泊施設、交通の便、安全の確保
- \* 被災者からお話を聞くこと：許されることなのか？
- \* 苛酷な体験をした方々に対する外部者のふるまい方？
- \* 「大変ですね」「頑張ってください」といった紋切り型（その場限り）ではない関係性を、どう作れるか？
- \* 「問わず語り」を聞くことに徹する（こちらから問い質さない）
- \* 繰り返し通う学生たち⇒「また来てくれた」という印象をもってもらえる⇒一過性ではない持続的な関係性の構築
- \* 自治会長からの被災体験聞き取りの要請⇒2012年度は聞き取りを中心にした実習に深化⇒たくさんの重い話を受け取る⇒それをどうまとめるか？ どうお返しするかという課題



# 聴き取りの対象

- \* ① 米崎小学校仮設住宅
- \* 住民からの被災体験の聞き取り（仮設住宅自治会からの要請によるもの）
- \* ② そのほかの地元住民（カキ養殖業者、縁者） 被災体験
- \* ② 市役所、小学校、地元企業経営者
- \* 復興状況とその課題
- \* ③ NGO・NPO関係者・ボランティア
- \* 現地での活動状況とその課題

# 被災体験の聞き取り

- \* 地域研究実習Ⅱ(グローバル文化学環専門科目)参加学生・教員が実施
- \* 2012年5月、7月、9月、11月 いずれも3日間の現地滞在中延べ41名(仮設住宅住民、漁協カキ養殖組合関係者)から聞き取り
- \* 形式
- \* インフォーマル・インタビュー(大まかな聞き取り項目を事前に考案するが、自由な話の流れに任せる) 一人(一組)1時間~3時間程度
- \* 聞き取り場所と形態
- \* 1) 集会所でのグループによる聞き取り
- \* 2) 仮設住宅での個人・複数の家族による聞き取り
- \* 3) 漁協事務所での机を分けての個人からの聞き取り
- \* 資料
- \* 1) フィールドメモを起こしたもの
- \* 2) テープ音声記録を起こしたもの
- \* 現在聞き取りデータの分析中

# これまでに見えてきたこと

## ①震災後の行動について

- \* 地震から津波まで:あらかじめ家族で避難・行動の段取りを決めていた例は少数
- \* 海の近く(海が見える場所)の人の方が逃げている＝地震後、津波の到来を想定した行動をとる
- \* 千り地震津波などの過去の体験⇒逆に「ここまでは来ない」という過信になった例も
- \* 誰といたか、誰といようとしたか、によって行動(その結果の生死)が大きく左右される

## ②「場所」と関係性の喪失 インターローカルな関係性の構築

- \* 陸前高田:もともと高齡化と人口流出:顕著⇒震災により加速化
- \* 雇用の消失、市街地の復興の遅れ⇒外に出て行った人々:戻らない状況
- \* 「陸前高田はエンゲル係数の低い町だった」(米崎小学校仮設住宅自治会長S氏) ⇒その意味する所:農作物や海産物などの食べ物をやり取りする交換経済が存在し、それが社会関係を支えてきた。⇒震災でその物的基盤が崩壊⇒ローカルな社会関係の再生産:困難が増す
- \* 外部からのボランティア、NGO・NPOの活動⇒陸前高田に外部との新しい繋がり回路をもたらす⇒「お茶っこ」カフェ(地域研究実習Ⅲ・Ⅱ)を通じたお茶大学生・教員の繰り返しの訪問⇒インターローカルな関係性構築の一助となる